

第八回野間清治彫刻会資料展

みなとよこはま、過去 未来

長 京子



三千坪余の広大な敷地の純日本庭園で、明治三九年に公開された。内苑と外苑からなる園内には旧徳明寺の三重塔をはじめとする園・垂文が十機、市指定が三種存在している。三重塔は三西園のシンボルとして園内中央の小高い丘にあり、聖武天皇勅願寺・京都徳明寺にあったもの複製。室町時代の建築、時間がなくて行けず、残念だった。

春の日帰り修学旅行は、バス二台、八二名の多人数で実施され、予期せぬハプニングにもめげず港町橋を通過した。

金沢文庫は林名寺と地続きで、特名寺の山門を過ぎると山あがり、池泉庭園にかかる赤い欄干の反橋と春橋が目に飛び込んで来る。そこでの記念撮影も、そこに左前方のトンネルを過ぎ、金沢文庫へ。鎌倉時代、金沢北条氏実時が、和漢の書籍を所蔵する為と建てた武家山荘で、現在は歴史博物館、神奈川県立金沢文庫として開館されている。

次に訪れた三渓園は、明治、大正期の実業家、原富太郎(雅号・三郎)によって造られた五万

坪程度の春を、ちよっとセンチメンタルな気分であつてみた。白からピンク、黄色、紫と、まるで花神流しをみているよう花たち。

ささ枝からおどかさなうねりへと変わる。人の心のありようを思わせるような咲きぶりに、いつのときも心打たれる。公園わきでは早くも暮らさるが春のやさしい日差しを浴びてふゆのかげやきを見せる。想像しこのころまもつてきた。この

明治二年に建てられ、日本舞家横山天鏡や、下村松山等が創作活動をおこなった場所でもある。平成十一年公開。日が射してきた園内の池では水鳥が数十羽つたりと泳いでおり、桜は三分咲き、もう一度ゆつくり来て見たいと思わせる行末だった。

中華街で働く彼女、普段は見えない顔を覗き見、そそくさと中華饅頭を買い、強い海風の吹くなか日抜き通りでバスを待つ。

ランドマークタワーは平成五年竣工。六九階の展望台からは海ほたるも見えて又格別だった。

港橋出の歴史を改めて感じた。

思いを添らせながらそそくさと見るとヒトリシズカがウィングをしていような姿をくまらさで何かしらまきまきしてしまつた。

ベチコートスイセンの黄色の何という鮮やかさ、パレリナのコスチュームのような花のふくらみがお可愛くておしやれて、ウフッと笑いがこみ上げてきた。これはサクランボ、これはハタタオキキョウ、カタトラノオの華は方彩よ、八意のドクダミは感動ものよ、真つ白の花が段々になつてつづくの・・・そして洋物とちがつた山野草は、朝に夕にちがった表情を見せてくれる。鼻が出た、鼻が出た、花が

随想 春風に吹かれながら

楠倉喜久枝

まうの。枝女の言葉の端々に、植物への深い思いを感じて、思わずひれ伏してしまつた。庭の隅に中にもそびえるコブシの大木の下で、ふわふわと春風に吹かれながら、山野草談義に時のたつのもおぼれてしまつた。いたたいたってきたヒコスミシや、半葉生など、十数種の草ものを、夫に手仏つもらいながら、小庭のあちこちにやさしく植えた。水を得て元気とより戻し、ははじめまして・・・と恥ずかしそうにうつ向いている山野草たち。こちま心解われ、朝の目覚めが楽しくなつた。春のやさしい空がどこまでも続く様子が、こつとりと夢見る乙女になつて

もつてきた。この間、近所のN夫人から、白の山吹が咲き出したので・・・と電話をしたので、主にお返事をしたり、主で山野草の言葉で、彼女はお走りで庭を案内してくれ、三十数年の歳月をかけたという庭の佇まいに、思わず目まいて見ると、

咲いた、その庭に一番可愛ささらされて、たゞそそくさりながら、消え入るような花が、風に打たれながらしげに咲いて、いるその姿にこそは感動して

